



## Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士 (医学)
報告番号	甲第1456号
学位記番号	第1042号
氏名	横尾 実乃里
授与年月日	平成 26年 12月 25日
学位論文の題名	Comprehensive assessment of cancer patients' concerns and the association with quality of life (がん患者が抱える悩みに対する包括的アセスメントならびに QOL との関連について)  Jpn J Clin Oncol. Vol. 44 : P.670-676, 2014
論文審査担当者	主査 : 鈴木 貞夫 副査 : 早野 順一郎, 明智 龍男

## 論文内容の要旨

### 【目的】

がん患者は治療の複雑化や生存期間の延長に伴い、身体・精神・心理社会的側面において、さまざまな症状や問題を抱えているが、適切に評価されサポートされていない現状がある。そこで、本研究では、がん患者の主観的な悩みを包括的に評価し、QOL との関連を検討し、今後の多面的なサポート体制の構築につなげることを目的とした。

### 【対象/方法】

本研究では、インターネットを通じて2012年10月22日～24日の期間で対象者をリクルートした。適格基準は、①20歳以上、②過去1年以内のがん治療で病院に通院した者である。対象者は、悩みの頻度・程度と共に社会背景（年齢、性別、婚姻状況、就労状況、教育歴）、医療情報（がん種、診断からの期間、再発/転移の有無）について、インターネット上の自記式質問票に回答した。悩みの頻度と程度は本研究においてあらたに開発したComprehensive Concerns Assessment Tool (CCAT)、QOLはEuropean Organization for Research and Treatment of Cancer Quality of Life Questionnaire - Core 30 (EORTC QLQ - C30)にて評価した。同一端末からの二重回答、登録情報と回答内容が一致しないデータ、反応時間が不適切な回答は削除した。対象者にはすべての質問に回答するよう依頼したため、欠損値は生じなかった。がん患者の各悩みの頻度は記述統計で算出し、各悩みとQOLとの関連は重回帰分析で検討した。本研究の実施については国立がん研究センターの倫理委員会の承認を受けており、すべての質問に回答することをもって研究参加に対する同意とみなした。

### 【結果】

1009人のがん患者がリクルートされ、うち807人から回答が得られた(回答率80.0%)。因子分析により、質問項目は、「日常生活に関する悩み」「医療情報に関する悩み」「精神症状に関する悩み」「セルフマネジメントに関する悩み」「身体症状に関する悩み」の5因子とどの因子にも属さない「痛み」「便秘」を合わせた7因子に分類された。各悩みの頻度については、病気に対するセルフマネジメントに関する悩みが最も多く(61.2%)、ついで、精神症状に関する悩み(48.5%)、医療情報に関する悩み(46.2%)、日常生活に関する悩み(29.9%)、痛み(17.6%)、便秘(15.6%)、その他の身体症状に関する悩み(15.2%)であった。各悩みとQOLとの関連については、医療情報に関する悩み ( $p=0.18$ ) を除き、すべての悩みはQOLと関連していた ( $p<0.05$ )。

### 【考察】

本研究によりがん患者の悩みは多面的であり、特に、セルフマネジメントに関する悩みや不眠症状を含む精神症状に関する悩みを多くのがん患者が抱えていることが分かった。また、医療情報に関する悩みを除くすべての悩みは QOL と関連しており、悩みを個別ではなく多面的に評価し、多職種でサポートすることが、がん患者の QOL の向上につながることを示唆された。今後は、各悩みに対する具体的な介入方法を決定したうえで、CCAT による悩みの評価に基づいた介入を行い、QOL 変化を検討し、CCAT の有用性をさらに検証することが必要であると考えられた。

#### 論文審査の結果の要旨

【背景・目的】 がん患者は医療の進歩による治療の複雑化や生存期間の延長に伴い、身体・精神・心理社会的側面における多彩な症状や問題を抱えていることが示されている。その一方で、これら問題点等が適切に評価されサポートされていないのが現状である。そこで、本研究では、今後の多面的な患者サポート体制の構築のための基礎知見を得ることを目的として、がん患者の主観的な悩みを包括的に評価し、QOL との関連を検討した。

【方法】 対象となるがん患者を、インターネットを用いてリクルートした。適格基準は20歳以上の過去1年以内になん治療で病院に通院した者である。対象者に、悩みの頻度・程度と共に社会背景（年齢、性別、婚姻状況、就労状況、教育歴）、医療情報（がん種、診断からの期間、再発/転移の有無）について、インターネット上の自記式質問票に回答を求めた。悩みの頻度と程度は今回開発した Comprehensive Concerns Assessment Tool (CCAT)、QOL は European Organization for Research and Treatment of Cancer Quality of Life Questionnaire-Core 30 (EORTC QLQ-C30)にて評価した。がん患者の各悩みの頻度は記述統計で算出し、各悩みとQOLとの関連は重回帰分析で検討した。なお本研究の実施については国立がん研究センターの倫理委員会の承認を受けた。

【結果】 1009人のがん患者のうち807人から回答が得られた(回答率80.0%)。因子分析により、CCATを構成する質問項目は、「日常生活に関する悩み」「医療情報に関する悩み」「精神症状に関する悩み」「セルフマネジメントに関する悩み」「身体症状に関する悩み」の5因子といずれにも属さない「痛み」「便秘」を合わせた7因子に分類された。頻度については、病気に対するセルフマネジメントに関する悩みが最も多く(61.2%)、ついで、精神症状に関する悩み(48.5%)、医療情報に関する悩み(46.2%)、日常生活に関する悩み(29.9%)、痛み(17.6%)、便秘(15.6%)であった。各悩みとQOLとの関連については、医療情報に関する悩み( $p=0.18$ )を除き、すべての悩みはQOLと関連していた( $p<0.05$ )。

【結論】 本研究により、がん患者の悩みは多面的であり、特にセルフマネジメントに関する悩みや精神症状に関する悩みを多くの患者が抱えていることが示された。また、悩みとQOLとの関連からは、悩みを多面的に評価し、多職種でサポートすることが、QOLの向上につながることを示唆された。今後は、具体的な介入方法を開発し、CCATによる悩みの評価に基づいた介入を行い、QOL変化を検討することが必要であると考えられた。

【審査の内容】 約20分間のプレゼンテーションの後に、主査の鈴木からは、本研究の対象者の代表性の有無、用いられた解析手法である因子分析や重回帰分析について、尺度の妥当性研究における validity と reliability の相違について、示された重回帰分析の統計学的な解釈等、主として研究の方法論や結果の解釈などについての9項目の質問を行った。第一副査の早野教授からは、インターネット調査を選択した理由とその利点、療養環境が異なる対象者集団では行った場合に想定される結果の差異、用いられたQOL尺度のがん患者における特異性、今回選択した説明変数と従属変数の双方に関連する介在要因の検討の必要性の有無など、結果の解釈と結果の臨床への還元、今後の研究の方向性などについて13項目の質問がなされた。第二副査の明智教授からは入院がん患者に頻度の高い精神症状、せん妄の予防・治療、入院中のがん患者の精神症状の早期発見方法に関しての3つの質問がなされた。いくつかの質問に関しては若干窮する点もあったが、全体的には満足のいく回答が得られ、学位論文の主旨を十分理解していると判断した。

本研究は、わが国のがん患者が抱える問題とQOLとの関連を検証するとともに、QOL向上に関連する問題点を同定したはじめての研究であり、意義の高い研究である。以上をもって本論文の著者には、博士(医学)の称号を与えるに相応しいと判断した。

論文審査担当者 主査 鈴木 貞夫 副査 早野 順一郎 明智 龍男